

平成30年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻8月号(通巻709号)

風土



容赦なき一語を享けぬさくら餅

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

この句には「東門居邸」の前書きがあります。「東門居」とは小説家永井龍男の俳号です。永井龍男は桂郎師の小説の師であり、桂郎師の庶民の人情の機微を繊細に描く小説の骨法は、すべて龍男から学んだものです。「容赦なき一語」とは龍男からの叱咤でしょう。「さくら餅」の甘さとの対比が見事です。

あぢさゐや軽くすませる昼の蕎麦

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

桂郎師は食通で知られていますが、中でも蕎麦好きは有名です。特に藪蕎麦を好みました。更級蕎麦と違い、蕎麦の実の甘皮を揃り入れた淡い緑色の蕎麦です。「あぢさゐ」から梅雨時を想像します。「軽くすませる」のは食欲がないのか、あるいは夕べの酒がまだ残っているのかもしれませんが。いずれにせよ季節と食べものとの絶妙なバランスがこの句の魅力です。

暝りては秋風われを離れゆく

(句集『幻』より平成六年作)

まず器師にとって「秋風」は、万物衰退の季節に吹く蕭然としたもの悲しさを感じるものとしてこの後の句にも何度か登場してきます。また人の魂をはらんだ季語と捉えているようです。この句も妻を病院に残しているのです。「暝りては」は眠ることではなく、目を閉じて考えにふけることです。「秋風われを離れゆく」とは、そのたびに妻との魂の交信が淡くなっていくと感じているのです。

妻とゐて声といふもの初明り

(句集『幻』より平成七年作)

この句には「病院より正月帰宅許さる」の前書きがあります。ほとんど寝たきりの状態ですが、特別許可が出たのです。普段は一人住まいの器師です。「妻とゐて声といふもの」がどんなにありがたいことか、器師はしみじみと感じ入っているのです。一年のはじまりの「初明り」であればなおさらです。

大原志

南うみを

春志へ代田明りの畦を踏み

緑さす石こそよけれ大原志

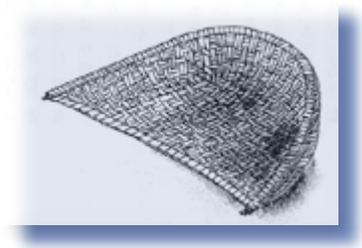
若狭・常高寺にて月遅れの

荒々と筍流し放哉忌

放哉の留守続くなり墓

田を植うや映りたる家くしやくしやに

あめんぼう早苗に脚をかけもして
早苗田にあつまつてゐる村の雨
朴若葉ゆらりと昼の日をこぼし
石庭の海をいつきに夏の蝶
甕を叩くやぼうふらの貌ゆがむ
葛の蔓三つ巴なる梅雨入りかな
鮎の馴れてみづうみしろがねに



竹間集

同人作品



栗の花

内藤 静

磯巻のしのびわさびも傘雨の忌
たてがみを三つ編みにして風五月
青梅に紅さし初めし地蔵かな
かはせみの水切り己が影を切る
躁になり鬱になりして栗の花
海苔の店かつぶしの店夏盛ん
羅のみゆき通りを魚のごと

若 夏

宮川みね子

杉山の杉まつすぐに夏来る
聖五月飛びたつ鳥が藁こぼす
若夏の藍よりあがる糸の束
若葉風机上の木目に流れかな
ΣKIはづす薄着の腕時計
スタンドのアームを上げて火取虫
教会の正午のチャイム薔薇香る

朴の花

浜 福恵

歩行器着く茅花吹く野に出でてみむ
草の名に「にしきごろも」やほとけみち
薬師如来の撒き給ひしか筆竜胆
まだ赤き浮葉をつつく稚魚の群
振り向けば草に控へて墓の貌
墓が鳴く噴水のいとひそやかに
由良川に枝流本流朴の花

かたつむり

門伝史会

子燕を鳴かせ交番いつも留守
夏立つや牧場の朝のヨーグルト
黒揚羽魔女のごとくに現はるる
鶯の声近くして朝茶かな
膝ついて湧水汲む子青嵐
江戸名物「さるやの楊枝」祭来る
日本橋の空が見たいとかたつむり

桐の花

鈴木石花

腹式に息を吹き込む紙風船
ひらひらと姫蛭蝶下向きに
就職の一年経し娘若葉燃ゆ
世界一の阜月園過ぎ外科医院
花は葉に癒えてより来し山の家
明日着る喪服衣桁に桐の花
多佳子忌や我家に掲ぐ誓子の書

花 茨

山田暢子

若葉かな窓開けて部屋休まする
母の日のケーキは小樽より届く
毎日が休日薔薇の花が咲き
麦秋や木簡の文字読めぬまま
香水を忘れてすでに半世紀
野に咲けば野の花となる花茨
花茨後生大事に小さき棘

聖 五月

岩木 茂

幻日の五湖を眼下に朴の花
檣咲く神話の海を引き寄せて
常神の夏百日の大蘇鉄
はまなす暁や時かけ寄する沖の波
聖五月穂の一粒の麦を噛み
翁草古戦場より持ち帰る
鍾乳洞根の国のこゑ滴らす

山河集

同人作品



南うみを選

片耳を飾る少年夏来る

川田好子

夏はじめ古端溪をみる鳩居堂
稲荷祀る銀座路地裏五月闇
新茶買ふ桃青立机の日本橋
桃青句碑の日本橋「鮎佐」水を打つ

釣竿の一気に撓ふ青嵐

瀬戸薫

麦の穂の風と語らふ地平線
椰子の木の根本は細し南風
雨音の静かになりぬえごの花
両腕も眼鏡も濡らす田草取

しろがねに雲の膨み五月来る

上辻蒼人

坊守の眠たき時や手鞠花
飛火野の風騒ぎ出す袋角

新緑や畝傍の山に裏の顔
前山に濃淡のあり茄子畑

まず正座そしてあぐらや夏座敷

榎本ふじえ

牡丹の今開かんとおちよぼ口
若竹の風の機嫌に逆らはず
藤の房風があやして通り過ぐ
白牡丹闇ふるはせて崩れけり

傘雨忌の楊子袋に端唄かな

森田節子

家ごとに三步の橋や花菖蒲
若楓日の斑のさやぐ石畳
学僧の山に消え入る青嵐
僧坊に暮らしのけむり椎の花

風土独語／南 うみを



新茶買ふ桃青立机の日本橋

川田 好子

「桃青」は芭蕉の俳号で「芭蕉」は庵号です。また「立机」とは俳諧宗匠として「文台」を授与されることです。延宝五年（一六七七）、桃青は日本橋の小田原町に俳諧宗匠の門を開きました。作者は俳諧師としての出発と日本の道の出発を想い重ねました。「新茶」の初々しさもそれに適います。

畳目を板目を這ひて夏来る

下山田美江

俳句は読み手が想像力を補完することで、その世界を完成させます。読み手は「畳目を板目を這ひて」ではまだ何ものか解りません。「夏来る」と読み初めて赤子を想像するのです。躍動の夏が来るのと赤子の活発な動きが重なります。

釣竿の 一気に 撓ふ 青嵐

瀬戸 薫

この句は「釣竿」と「青嵐」との取り合わせです。それを「一気に撓ふ」で繋いで、釣りをする人物の動きと青々とした木々のざわめきを読み手に想像させます。これも躍動感があります。

鳩居堂に 一万歩目の汗を拭く

杉本葉王子

鳩居堂は江戸時代から続く筆墨の老舗です。しかし作者は鳩居堂には触れず、一万歩目の汗を拭ったことだけを句にしました。

この句にはぐらかされたような面白さがあります。

しろがねに雲の膨み五月来る

上辻 蒼人

作者は奈良の山河に囲まれて暮らしています。この「しろがねに雲の膨らみ」は、都市の雲を見ても掴まえられません。雨後の山々が吐きだす小さな雲が、寄り合いながら日差しに太っていく様子を描いたものです。雲との親和感が生んだ作品です。

短夜に息子の声や「ころぶなよ」

榎野あさ子

作者はご子息を不慮の事故で失いました。ついこの間、同行しながら懸けてくれた「ころぶなよ」の声が耳から離れません。死を受け入れがたいままはや、朝が来たのです。

白牡丹闇ふるはせて崩れけり

榎本ふじえ

「花王」と呼ばれる「牡丹」は散るといふより「崩れる」に相応しい花です。作者は夜の闇の中で、終わらんとする「白牡丹」を「闇ふるはせて」と表現したのです。

はやばやと祭提灯鳩居堂

奥田 茶々

この「祭提灯」は山王祭の提灯で、六月十日から十八日まで行われます。日本の伝統文化を守る「鳩居堂」は他の店に先駆け、「はやばや」と「祭提灯」を懸けたのです。鳩居堂の佇まいに「祭提灯」はよく合います。

傘雨忌の楊子袋に端唄かな

森田 節子

「傘雨忌」は久保田万太郎の忌日です。昭和三十八年五月六日になくなりました。戯曲家で俳人の万太郎は江戸文化をこよなく愛しました。作者は爪楊枝の袋に江戸端唄が書かれているのを見つけ万太郎に想いを馳せたのです。

風土集



南うみを選

崖壁の鉄階降りる卯波風

横浜

下山田美江

県警の出払ふペリー開港祭

畳目を板目を這ひて夏来る

半折に茅花流しの歌一首

西日浴び潜水艦の浮上せり

夏柳銀座の女の眉細く

京都

杉本葉子

歌舞伎座の歌舞伎稲荷に夏帽子

精工舎銀座の空に夏を呼ぶ

鳩居堂に一万歩目の汗を拭く

十葉の蕾みやつんと口細め

死は突然降り来ぬ子よ木下闇

藤

沢植野まこと

短夜に息子の声や「ころぶなよ」

せはしくも過ぎし年月青しぐれ

夏浅き夕べの空へ旅立ちぬ

打ち水の上をころがる空の色

はやばやと祭提灯鳩居堂

東京

奥田茶々

煽ぎみては鳩居堂の団扇かな

眠られぬ三越ライオン明易し

銀ぶらの野暮なりユックと夏帽子

麦秋や銀座銀座のありし江戸

鯉節の八木長に閉づ白日傘

大和

落合絹代

設へる御旅所江戸のとびの技

大山蓮華足早に過ぐ頭陀袋

じやがたらの花の坂ゆく文土村

サーファーの次の卯波へ立て直す

逗子

高橋まき子

二階まで駆け上がる音柿若葉

羅の前に転がるボールかな

夏の雨傘をさす子とささぬ子と

蜜豆や小銭きつちり出し合つて